

韓国における学校不適応中学生に対する学校社会事業(スクール・ソーシャルワーク)の効果に関する研究：自尊感情向上のためのグループプログラムを中心に

都, 基鳳
九州大学大学院人間環境学研究院

野島, 一彦
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/8015>

出版情報：九州大学心理学研究. 7, pp.21-26, 2006-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

韓国における学校不適応中学生に対する学校社会事業(スクール・ソーシャルワーク)の効果に関する研究 — 自尊心向上のためのグループプログラムを中心に —

都 基鳳 九州大学大学院人間環境学研究院, 外国人訪問研究員
野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

A study on the effect of school social work on the maladaptation of the junior high school students in Korea — Focused on the group program for the improvement in self-esteem —

Giebong Do (*Visiting researcher, Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)
Kazuhiko Nojima (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This study is carried out by social worker who intervened in the unadaptable students in the middle school. They are divided into two groups: one is a test group, and the other is a control group. The social worker performed the group program and compared before with after performing the program. After then, it was shown that self-esteem scores in the test group made a difference statistically, while self-esteem scores in the control group didn't. Especially the social worker who cooperated with the students, family, and school, were able to cope with the individual problems of the students by means of student consultation, parents telephone consultation, a consultation with a counseling teacher and a homeroom teacher in parallel with group consultation. Therefore, it is believed that the group program had an effect on the improvement of self-esteem.

Keywords: junior high school students, maladaptation, self-esteem, social worker, group program

問題と目的

韓国の学校は、急激な身体的変化と心理・情緒的变化過程にある青少年にとって重要であり、個人の潜在力と知的能力を啓発して社会化過程を促進し、全人教育を実現することを目的としている。大部分の時間を学校で過ごさなければならない韓国の青少年たちにとって、学習中心の教育課程は様々な問題を引き起こしている。学校生活に適應することが難しいため、不登校、家出、アルコール、喫煙、盗癖、学校暴力、反社会的行動などの深刻な社会的問題が生じている。特に大邱地域では、中学生783人を対象に学校内で生徒たちの間に発生する学校暴力の経験を調査した結果、加害経験が32.5%、被害経験が40.7%となっており、学校生活の適應上の問題が起こっていることが分かった(都・全・野島, 2005)。

ちなみに日本での学校不適応問題については、森下(2004)が学校に関連した要因と非行行動の程度を検討し、高非行集団は学校適應の難しさを示しているし、不適応生徒たちの背景には人間関係と対人関係能力の未成熟があると指摘している。また学校不適応による不登校問題について、不登校を経験した生徒は、中学卒業5年後に就学も就職もしない割合が22.8%で、不登校を経験した生徒の40%が自己主張、社会生活において問題を持っ

ていると指摘されている(文部科学省, 2004)。

韓国においては、青少年問題対策として教育部では、1986年に「進路相談教師制度」を実施しているが、過重な業務負担と専門的介入技術不足で不適応生徒たちの問題に積極的に対処するには難しく、これを補うために「学校相談自願奉事制度」を実施している。しかし、60時間の相談訓練だけでは専門性不足で、現実的に生徒たちの社会・情緒的問題に適切に介入することができない実情である。

1995年からの教育部の「学校社会事業試験事業」以後、日本と同じくまだ学校社会事業の制度化は行われていないが、多くの方面で学校社会事業(school social work)活動が活発に展開されている。学校社会事業は、学校内で生徒たちが学校生活に適應する上で、困難となっている社会・情緒的問題を乗り越えるように援助する活動である(Johnson, 1965)。

このような状況の中で社会福祉士(social worker)である筆者は、某中学校において学校社会事業を担当する機会を得た。学校内の相談担当者不足と非専門性のために、学校が単独で学校不適応問題を解決しにくいので、学校内で社会福祉士が直接介入して生徒たちにサービスを提供する学校社会事業を実践するには意義があると考えた。学校社会事業の実践は、学校不適応生徒たちが

一次的な関心の対象にならなければならないことは議論の余地がない。そこで、学校不適應問題を解決するための接近方法は多様だが、青少年を対象にしたグループプログラム (group program) を中心に展開することにした。ちなみに日本では、小学生が学級生活で活用しているソーシャル・スキルと学級適応との関係についての研究から、小グループによるプログラムの実施が必要だと指摘されている(小野寺・河村他, 2004)。

尚、学校社会事業の実践と研究の大事な視点として、<自尊感情 (self esteem)> に注目した。というのは、学校不適應による問題は低い自尊感情と関係が深いように思われるからである。自尊感情とは、人間の行動に影響を及ぼす性格特性で、個人が自己自身に対して持つ肯定的な側面、自己受容、自己評価、自己尊重の態度である (Reber, 1985)。

社会的に悪い烙印を押される集団の場合、他人からの否定的評価を内面化して自己に対する否定的概念を持ち、これが否定的な自尊感情につながる (Croker & Major, 1989)。そして自尊感情が低い人は、自己の能力と成功に対する確信がなかなか持てないので、自尊感情が高い人に比べて、厳しい状況に対して適切な対処ができなくなる (Blankertz, 2001)。

一方、自尊感情は、個人の行動、性格、態度、感情などに影響を与えて、青少年期の学業成就とも密接な関係がある (Cohn & Korelly 1991)。Blume (1989) は、自尊感情と生徒たちの学業遂行能力を分離して扱うことができないと強調している。

以上のことから本研究では、学校不適應中学生に対し、自尊感情向上のためのグループプログラムを中心に社会福祉士が学校社会事業を実施し、その効果を明確にする

ことを目的とする。

研究方法

1. 対象

(1) 実験集団

実験集団は、大邱市 P 中学校の2, 3年生で、進路相談教師がグループプログラムの第1回目の参加者として依頼してきた学校不適應生徒たち11人 (Table 1)。プログラム実施期間中に転校と自退した生徒2人は分析から除外。

(2) 統制集団

統制集団は、大邱市 P 中学校の2, 3年生で、進路相談教師がグループプログラムの第2回目、3回目の参加者として依頼してきた学校不適應生徒の中で自尊感情点数、成績、学年などが実験集団と同じになるように選定した22人。

2. 測定尺度

自尊感情の測定尺度は、集団成就経験と肯定的支持による自負心と個人的な自尊心を測定するために [Robinson & Shaver (1973) に収録された] Coopersmith が作成した Self Esteem Inventory の50質問項目を25質問項目に減らしたもので、2段階評点尺度になっているものを使用。元尺度の内的信頼度係数は $\alpha = .81$ 。

3. 研究手続き

グループプログラムは週1回ずつ合計10回実施 (1999年4月19日～6月21日)。時間は朝の自習時間の80分間。場所は P 中学校の学校図書室。事前調査は 1999年4月

Table 1
実験集団の概要

構成員	学年	学校で依頼された問題類型	グループプログラム 出席回数
A	3	喫煙, 学校暴力, 盗癖	10回
B	3	喫煙, 学校暴力, 盗癖	10回
C	3	喫煙, 学校暴力, アルコール	10回
D	3	喫煙, 学校暴力, 金品強奪	10回
E	3	喫煙, 学習意欲喪失	10回
F	3	喫煙, 学習意欲喪失	10回
G	3	喫煙, 学習意欲喪失	10回
H	3	喫煙, 学校暴力, 盗癖, 金品強奪	10回
I	2	授業態度散漫, 不良生徒との接触	10回
J	2	授業態度散漫, 無理強い	8回目転校
K	2	家出, アルコール	4回目自退

12日に1回、フォローアップ調査は1999年7月19日に1回実施。

グループプログラムの事前、事後、およびフォローアップの時点で、自尊感情尺度を実験集団、統制集団に実施。

4. 分析方法

実験集団と統制集団の自尊感情得点の差について t 検定を行う。

Table 2
10回のグループプログラムの概要

回	内容	実施方法	課題(宿題)
1回	<ul style="list-style-type: none"> ● 別称作り ● 未完成文章を完成する 	<ul style="list-style-type: none"> ● 他の成員に知らせることができる別称を作る。 ● 未完成文章を完成してみることで、自己の特性と能力を見付けて構成員間の理解を促進する。 	
2回	<ul style="list-style-type: none"> ● 捨てたい私 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校生活、日常生活で捨てたい自己の姿(他人が思う姿と自己が思う姿)を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 捨てたい私の姿の中の2つを1週間、楽しいように捨てる
3回	<ul style="list-style-type: none"> ● 学校暴力に関して 	<ul style="list-style-type: none"> ● 暴力を加えた時の感じと暴力にあった時の感じ、その後の友達と教師との関係に対して自己の考えを言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 1週間、友達におつかいをさせない
4回	<ul style="list-style-type: none"> ● 今できることは何だろう? ● 私の人生目標を決める 	<ul style="list-style-type: none"> ● 現在実現可能な具体的な目標を決めて、目標達成のための実践行動を決める。目標を果たした後予想される自己の変化を言う。 ● 自己の人生目標を決めて実践行動を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 1週間、目標達成のための実践行動の中の1つを行う。 ● 1週間、友達の長点を1つ以上誉める
5回	<ul style="list-style-type: none"> ● お互いに必要なことを言い合う 	<ul style="list-style-type: none"> ● 各構成員は自由に率直な会話を交わして、お互いに必要だと考えられるものを言い合う 	
6回	<ul style="list-style-type: none"> ● 価値観を捨てる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 重要だと思う価値観を6つあげた後、2個ずつ捨てて、最後に1つの価値観だけを残す。そして各人が残した理由を言い、感想を話し合う。 	
7回	<ul style="list-style-type: none"> ● 私の自慢探し 	<ul style="list-style-type: none"> ● 身体、性格、対人関係で他人に自慢できることを5つあげてを発表し、感想を話し合う。 	
8回	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族絵を描く 	<ul style="list-style-type: none"> ● 事物や動物が持った特性と家族の特徴を連係させながら家族絵を描かせる。その後、家族を連想しながら説明するようにする。描かれない家族がいるかどうかを確認して、その理由を言う。 	
9回	<ul style="list-style-type: none"> ● 私を大事にしてくれる人探し 	<ul style="list-style-type: none"> ● 家庭、学校、友達、その他私を大事にしてくれる人と、自己を大事にしてくれる理由、感じを言い、さらに彼らにどのようにすれば報いることができるかを言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 私を一番大事にしてくれる人に手紙を作成する。
10回	<ul style="list-style-type: none"> ● 愛の布団で覆ってやる ● 所感文作成 	<ul style="list-style-type: none"> ● 別称だけ記録した紙を構成員たちに回す。構成員の肯定的な感じと長所だけを書いて渡す。受け取ったものを発表した後、感想を言う。 ● 集団を経験した後の自己の変化、感想を率直に具体的に書く。 	

グループプログラムの実際

1. 社会福祉士と学校との協力関係

社会福祉士が学校との協力関係を維持することは重要な事である。進路相談教師が、グループプログラムの運営に関して、社会福祉士と学校をつなぐ役割を果たした。すなわちグループプログラムの場所、時間、集団参加生徒たちの担任教師との打ち合わせ、生徒課長、教頭、校長への報告、社会福祉士の立場の学校側への伝達等の役目をした。毎週、グループプログラムが終わった直後に進路相談教師とのカンファレンスが行われた。

2. 事前説明と調査

グループプログラム実施の1週間前に、生徒たちに集団の目的と全般的なプログラムの内容を説明した。プログラム参加者たちは簡単に自己紹介をした。社会福祉士も自己紹介をして、プログラムに対する質問に答えた。またグループプログラムの活動で起こったことに対する秘密保持の大切さを知らせ、書面で約束を取り付けた。そして自尊感情尺度を事前調査として実施した。

3. グループプログラムの内容と実施方法

集団構成員は5～12人が一番理想的という研究報告と、集団の持続期間は8～12週間になると目標達成ができるというKenneth(1991)の提案を土台にして、本研究では、非行行動を示す生徒が学校の様々な活動に積極的ではなく、自己表現が容易ではないことを勘案して、グループ

プログラムを作成した。10回のプログラムの内容、実施方法と課題(宿題)はTable2のとおりである。

4. グループプログラム以外の活動

グループプログラム以外の学校社会事業の活動としては、(1)集団構成員の個別相談を20回実施(学校図書室)、(2)相談教師及び担任教師の相談を12回実施(学校図書室及び教務室)、(3)生徒たちから26回、父兄たちから8回の電話相談を実施。

5. フォローアップの集まりと調査

グループプログラム終了後1ヶ月が経過したところで、フォローアップの集まりを実施した。グループプログラム以後の学校生活と家庭生活における変化について話し合われた。そしてプログラムの持続的な効果性を検証するために事前・事後に使われたのと同じ自尊感情尺度を実施した。

結果と考察

1. 実験集団と統制集団の自尊感情得点の比較

実験集団、統制集団のグループプログラムの事前、事後、フォローアップの時点での自尊感情得点を図示したものがFig.1である。

(1) 事前の実験集団と統制集団の自尊感情得点の比較

グループプログラム実施前の事前の実験集団の自尊感情得点は13.55 (SD=3.50)、統制集団のそれは13.00 (SD=2.67)である。t検定の結果 ($t=.480$)、有意差はない。したがって、事前では両集団は等質であると考えることができる。

(2) 実験集団の事前-事後、事前-フォローアップの自尊感情得点の比較

実験集団の事前の自尊感情得点は13.55 (SD=3.50)、事後のそれは15.77 (SD=3.30)である。t検定の結果 ($t=2.67$)、 $p<.05$ で事後の得点が有意に高い。

実験集団の事前の自尊感情得点は13.55 (SD=3.50)、フォローアップのそれは15.55 (SD=3.30)である。t検定の結果 ($t=2.61$)、 $p<.05$ でフォローアップの得点が有意に高い。

(3) 統制集団の事前-事後、事前-フォローアップの自尊感情得点の比較

統制集団の事前の自尊感情得点は13.00 (SD=2.67)、事後のそれは13.13 (SD=2.62)である。t検定の結果 ($t=.64$)、有意差はない。

統制集団の事前の自尊感情得点は13.00 (SD=2.67)、フォローアップのそれは12.31 (SD=3.48)である。t検定の結果 ($t=1.09$)、有意差はない。

(4) 事後の実験集団と統制集団の自尊感情得点の比較

—●— 実験集団 —■— 統制集団

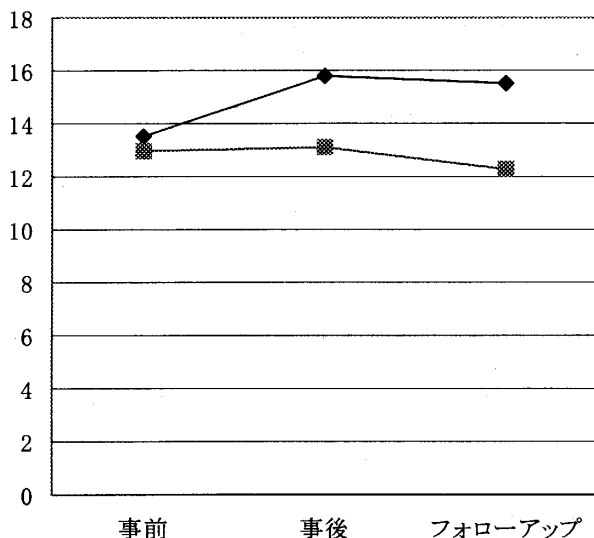


Fig. 1 実験集団・統制集団の事前・事後・フォローアップにおける自尊感情得点

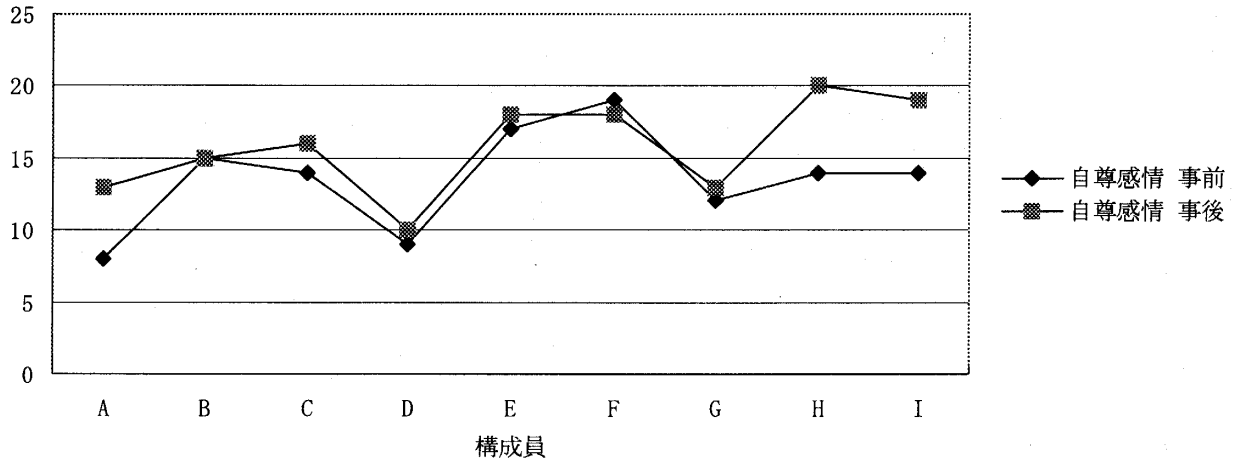


Fig. 2 実験集団構成員のグループプログラムの事前・事後の個別自尊感情得点

グループプログラム実施後の事後の実験集団の自尊感情得点は15.77 (SD=3.30), 統制集団のそれは13.13 (SD=2.62)である。t検定の結果 (t=2.35), $p < .05$ で実験集団の得点が有意に高い。

(5) フォローアップの実験集団と統制集団の自尊感情得点の比較

フォローアップの実験集団の自尊感情得点は15.55 (SD=3.00), 統制集団のそれは12.31 (SD=3.48)である。t検定の結果 (t=2.43), $p < .05$ で実験集団の得点が有意に高い。

(6) まとめ

前述の1~5の結果から、グループプログラム等を体験した実験集団は、事後、フォローアップにかけて自尊感情得点が有意に上昇していることが認められる。それに対して、グループプログラム等を体験していない統制集団には有意な変化が認められない。これらから、学校不適応中学生に対する(自尊感情向上のためのグループプログラムを中心とした)学校社会事業の効果が実証されたと言える。

2. 実験集団構成員のグループプログラムの事前・事後の個別自尊感情得点

実験集団構成員のグループプログラムの事前・事後の個別自尊感情得点を図示したものがFig.2である。

9名中7名(A, C, D, E, G, H, I)が、グループプログラム実施後に自尊感情得点が増加している、1名(B)は自尊感情の変化がなく、他の1名(F)は自尊感情得点が減少している。

このことから、(自尊感情向上のためのグループプログラムを中心とした)学校社会事業の効果は、個別にみると殆どの参加者にとっては肯定的であるが、一部には

不変、否定的な者もいるということが分かる。このような参加者がより良い体験をするようにするにはどうしたらよいかは、今後の検討課題である。

3. 総合考察

以上のことから、(自尊感情向上のためのグループプログラムを中心とした)学校社会事業は自尊感情の向上に効果的だったことが分かる。社会福祉士が、グループプログラムと並行して生徒-家庭-学校と連携しながら、生徒個別相談と電話相談、父兄電話相談、相談教師と担任教師との相談などを行ったことは、効果的であった。グループプログラムの時間が経過するにつれて、問題児という烙印を押されてきた自分のイメージを、課題を遂行しながら肯定的な自己の確立へと向けていくことができた。

学校社会事業の実践で実施されたグループプログラムは、学校から依頼された問題性向がある生徒たちで構成されたから、構成員相互間でモデリングできる対象を捜しにくいし、何よりも集団の構成員となること自体が参加者たちに烙印効果を加重させる可能性を排除することはできなかった。しかし社会福祉士は問題解決のために集団構成員たちの話を積極的に傾聴し、受容して生徒たちを支持して、彼らが持った問題を解決するのに集中的な介入をすることができた。そして同じ問題を持った構成員相互間に支持的関係と共感が形成されて、力動的な集団になったと思う。

ただ、学校生活不適応生徒に対する社会福祉士の長期間の集中的な介入という多大の経済的・労力的な投入のわりには、介入の効果が学級環境や学校生活では発現されにくいのではないかと、効果が長く持続することができないのではないかとといった疑問は、教師の間から

当然起こることであろう。

しかしそれと関連して、生徒の学校生活適応度を評価する教師の視点が固定化されている可能性も排除することができない。教師の低い期待は、変化した生徒にその変化を長続きさせる動機を低下させることになる。逆に、教師が生徒の変化に対する支持と誉める言葉をかける場合は、生徒の肯定的な変化は持続することができる。

最後に、(自尊心向上のためのグループプログラムを中心とした)学校社会事業が生徒たちに肯定的な変化を与えたことが今回の研究では示されたが、後続的なプログラムや多様な介入がない場合、その変化がまた元の状態に戻る可能性が高い。それだけに社会福祉士は、学校と連携して個人や小集団を変化させるプログラムの開発、家庭環境や社会環境等への介入方法の開発をしていくことが求められるということを強調しておきたい。

引用文献

- Blankertz, L. 2001 Cognitive components of self-esteem for individual with severe mental illness. *American Journal of Orthopsychiatry*, 71(4), 457-465.
- Blume, J. M. 1989 The effects of implenting a self-esteem and performance of elementary school children. Doctoral Dissertation Los Angeles: Califonia School of Professional Psychology, 20-35.
- Cohn, M. & Korelly, D. 1991 For better reading-A more positive self image. *Elimentary School Journal*, 701, 199-201.
- Croker, J. & Major, B. 1989 Social stigma and self-esteem: the self-protective properties of stigma, *Psychological Review*, 96(4), 608-630.
- 都 基鳳・全 宰一・野島一彦 2005 韓国における中学生の学校暴力の経験と要因に関する研究 九州大学心理学研究, 6, 21-27.
- Johnson, A. 1965 Social work practice in school. *Encyclopedia of Social Work*, New York:N.A.S.W., 672.
- Kenneth, E. R. 1991 *Social work practice with groups*. Brooks/Cole Publishing Company.
- 文部科学省 2004 平成15年度不登校生徒追跡調査報告書
- 森下 剛 2004 中学生の非行行動に関連する要因についての探索的検討—学校における非行予防プログラムの開発に向けて— *カウンセリング研究*, 37, 135-145.
- 小野寺正己・河村茂雄・武蔵由佳・藤村一夫 2004 小学生の学級適応への援助の検討—ソーシャル・スキルの視点から— *カウンセリング研究*, 37, 1-7.
- Reber, L. 1985 *Dictionary of Psychology*. Penguin Books Ltd, 678.
- Robinson & Shaver 1973 *Measurer of social psychological attitudes*. Hunarbor: Survey Reserch Center, Institute for Reserch, 84-87.